



Sense of Coherenceの因子に注目した文章完成法の 反応の検討

雲財, 啓

(Citation)

神戸大学発達・臨床心理学研究, 16:19-22

(Issue Date)

2017-03-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/E0041160>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/E0041160>



Sense of Coherence の因子に注目した文章完成法の反応の検討

Consideration of response to sentence complement test focused on component of Sense of Coherence

雲財 啓*

Satoshi UNZAI*

要約：近年注目されている健康生成論モデルにおいて、Sense of Coherence (SOC) は健康に向かう力と言われ、このモデルの中核でもある。SOC は把握可能感、処理可能感、有意味感の 3 つの因子から構成されているが、従来の研究は各因子の機能を個々に検討するに留まり、各因子の組み合わせによる差異は十分に検討されてきたとは言えない。そこで本研究では、SOC の下位因子をクラスター分析により分類し、置かれている環境や日常生活の志向性の差を文章完成法 (SCT) により検討した。クラスター分析の結果、把握可能感高群、有意味感高群、SOC 低群、SOC 高群の 4 群に分類された。SCT の反応を肯定的反応、否定的反応、両価的反応、中立的反応に分類し、4 群の反応の差異を χ^2 分析により検討した結果、各群の反応に差異が見られた。SOC 高群において肯定的反応が多く、SOC 低群において否定的反応が多かったことは、従来の研究で指摘されてきた SOC の有用性を支持するものであった。また、有意味感高群、把握可能感高群においても反応に差異が見られたことは、SOC の各因子の高低の組み合わせによって差が出ることを示唆している。

I. 問題と目的

慢性疾患など、精神的に健康を害しやすい状態に置かれながらも健康を保つ能力として健康生成モデルが注目されている (森山・杉田, 2007; 橋爪・榎木・中井, 2005)。健康生成モデルとは、Antonovsky (1987, 山崎・吉井訳, 2001) によって提唱されたモデルで、このモデルの中核となる概念が Sense of Coherence (首尾一貫感覚、以下 SOC と略) である。SOC は把握可能感 (comprehensibility)、処理可能感 (manageability)、有意味感 (meaningfulness) の 3 つの下位因子が想定されており、把握可能感とは内的・外的どちらの環境からも受ける刺激を理解・予測する力、処理可能感とは刺激をうまく処理できると感じる力、有意味感とは刺激や刺激の処理についてやりがいや関わる価値があると感じる力であると定義されている (Antonovsky 1987, 山崎・吉井訳 2001)。SOC が高いことは、ストレスを減少させること (Carmel & Bernstein, 1990; Kaiser, Sattler, Bellack & Dersin, 1996), QOL を上昇させること (牧山, 2011), ウェルビーイングを上昇させること (Söderberg, Lundman & Norberg, 1997; Adams, Bezner, Drabbs, Zambarano & Steinhardt, 2000) がわかっており、高い SOC は健康の保持に役立つとして、SOC の有用性が実証的に検証されている。

このように SOC の有用性は検討されているが、十分に検討され

てきていない問題の一つに SOC の因子構造がある。SOC の測定には Antonovsky (1987, 山崎・吉井訳, 2001) が作成した SOC スケールが用いられるが、この尺度の各下位尺度は相関が強く、従来の研究でも 3 つの下位尺度をまとめて SOC を一因子として捉えている研究が多く見られる (太田・樋口・神代・大和・杉村, 2015; 嘉瀬・大石, 2015)。SOC スケールで測定された各下位尺度をまとめて SOC として捉えることは理論上問題なく (Antonovsky 1987, 山崎・吉井訳 2001), SOC を一因子として捉えた場合の信頼性、妥当性について実証的に検証されている (遠藤・満石・和・大石, 2013)。一方で、SOC スケールは把握可能感、処理可能感、有意味感を下位因子に持ち、これらの上位に SOC があるとする二次三因子構造を当初想定しており (戸ヶ里・山崎, 2005), Antonovsky (1987, 山崎・吉井訳, 2001) は一因子にまとめることは理論的に問題がないとしながらも、各下位因子に分けてそれぞれの機能を検討することも必要であるとしている。

さらに、Antonovsky (1987 山崎・吉井訳 2001) は SOC の因子構造について、下位因子の組み合わせによって下位因子の機能が異なることを述べ、例えば有意味感の高低によって把握可能感の機能が異なるとしている。このことから、SOC の下位因子を組み合わせた上で下位因子の機能を考える必要があると考えられる。下位因子

* 神戸大学大学院人間発達環境学研究科博士課程後期課程

それぞれの機能については、例えば藤里・小玉（2011）が就職活動に伴う成長感を取り上げ、処理可能感と有意味感には促進的な影響があること、把握可能感には抑制的な影響があることを指摘している。このように下位因子を個別に取り上げた研究はあるが、その組み合わせに注目した研究は必ずしも十分ではない。Antonovsky の理論に基づくと、下位因子の組み合わせによって因子の機能が異なると考えられ、その結果自分自身の状況や日常生活の態度に差異が出ると想定される。

そこで本研究は、SOC が二次三因子構造であることを前提に、SOC の下位因子の組み合わせによって自分自身の状況や日常生活の態度の差異を探索的に検討することを目的とする。

II. 方法

1. 調査時期及び調査対象者

近畿地方の総合大学である A 大学に所属する学生に対して 2009 年 12 月に質問紙調査を実施した。質問紙の配布は、授業終了の直前に対象者に質問紙の趣旨を説明し、その場で記入してもらった後回収した。301 名から回答が得られ、記入に不備のあった 28 名を除いた 273 名（男性 93 名、女性 180 名、平均年齢 20.08, $SD = 1.51$ ）を分析の対象とした。

2. 調査内容

(a) 29 項目版 SOC スケール（以下 SOC-29 と略） Antonovsky が作成した尺度（Antonovsky, 1987 山崎・吉井訳 2001）であり、把握可能感、処理可能感、有意味感の 3 因子構造をとった。各下位尺度の項目数は把握可能感 11 項目（項目例：あなたは、不慣れな状況の中にいると感じ、どうすればよいかわからないと感じることがありますか?）、処理可能感 10 項目（項目例：あなたは、不当な扱いを受けているという気持ちになることがありますか?）、有意味感 8 項目（項目例：あなたは、日々の生活で行っていることにほとんど意味がない、と感じることがありますか?）の合計 29 項目を使用した。各項目に対して“とてもよくある”（1 点）から“まったくない”（7 点）のような 7 段階評定による回答とし、各下位尺度の得点を合計したものを各因子得点とした。

(b) 文章完成法（Sentence Completion Test, 以下 SCT）調査対象者の外的および内的状況を具体的に把握できる SCT（小林, 1992）を用いた。刺激文は、精研式 SCT（佐野・横田, 1960）を参考に対象者自身の状況や日常生活の態度を把握するために“世の中”、“私の日常”の 2 つを作成し、刺激文に続くように文章を記入してもらった。

分析においては SPSS Statistics を使用した。

III. 結果

1. 基礎統計量

検討を行うにあたり、SOC-29 の各下位尺度の平均値、標準偏差、クロンバックの α 係数を Table 1 に示した。有意味感については、十分な α 係数（ $\alpha = .87$ ）が確認され、把握可能感、処理可能感については、概ね満足できる値（ $\alpha = .71 \sim .76$ ）となった。

2. クラスタ分析による調査対象者の群分け

次に SOC-29 を用いてグループ内平均連結法による階層的クラスタ分析を行い、解釈可能性の観点から 4 つのクラスタを採用し

た（Figure 1）。また、各クラスタの特徴を検討するために得られた 4 つのクラスタを独立変数、各下位尺度の標準得点を従属変数とした分散分析を行った。その結果、各下位尺度で主効果が有意であったことから（把握可能感: $F(3, 269) = 147.88$, 処理可能感: $F(3, 269) = 116.33$, 有意味感: $F(3, 269) = 135.85$ ）、各下位尺度において多重比較を行った。把握可能感については、第 1 クラスタ、第 3 クラスタが第 2 クラスタ、第 4 クラスタより低かった。処理可能感については、第 3 クラスタが他のどのクラスタよりも低く、第 1 クラスタ、第 2 クラスタが第 4 クラスタよりも低かった。有意味感については、第 3 クラスタがどのクラスタよりも低く、第 2 クラスタが第 1 クラスタ、第 4 クラスタよりも低く、第 1 クラスタが第 4 クラスタよりも低かった。

以上の検討からそれぞれのクラスタを解釈した。第 1 クラスタは把握可能感が低く有意味感が高いことから有意味感高群と解釈した。第 2 クラスタは有意味感が低く把握可能感が高いことから把握可能感高群と解釈した。第 3 クラスタは 3 つの下位尺度の標準得点が -0.5 を下回っていることから SOC 低群と解釈した。第 4 クラスタは 3 つの下位尺度の標準得点が +0.5 を上回っていることから SOC 高群と解釈した。

	平均	標準偏差	α
把握可能感	38.19	7.41	.71
処理可能感	43.14	8.17	.76
有意味感	36.86	8.35	.87

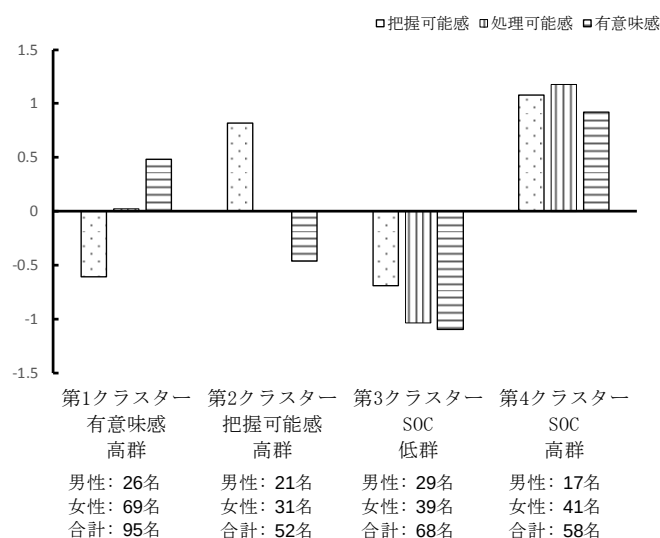


Figure 1 SOC-29によるクラスタ分析

Table 2 反応内容による分類基準

分類	定義	反応例	
		“世の中”	“私の日常”
肯定的反応	自身や周囲に対する積極的な反応	“何とかなるものだ” “きっと良くなる”	“けっこう楽しい” “意味あるものだと思う”
否定的反応	自身や周囲に対する消極的な反応	“大変なことが多い” “そんなに甘くない”	“退屈” “だらけている”
両価的反応	肯定的反応と否定的反応のどちらもを含む反応	“楽しいこともつらいこともある” “しんどいこともあるが、いいこともあるからしっかり頑張りたい”	“は、大変ではあるが、喜びである” “山あり谷あり”
中立的反応	上記3つのどの反応にも分類できない反応	“知恵と世渡り” “は広い”	“ふつう” “ボチボチ”

3. SCT の反応内容

SCT の反応内容を検討するために Table 2 に示すような基準をもとに反応内容を肯定的、否定的、両価的、中立的に分類し、群ごとの各刺激文に対する反応数を確認した (Table 3)。

SCT の反応の差異を確認するため、各刺激文への反応数について 4 (反応の種類) × 4 (カテゴリー) で χ^2 検定を行った。その結果、どちらも度数分布に有意な差が確認され (“世の中”: $\chi^2 (9) = 43.46, p < .001$; “私の日常”: $\chi^2 (9) = 48.53, p < .001$), 残差分析を行ったところ以下の結果になった。刺激文 “世の中” において、有意味感高群は肯定的反応、両価的反応が有意に多く否定的反応が有意に少なく、把握可能感高群は肯定的反応が有意に少なく、SOC 低群は否定的反応が有意に多く肯定的反応が少なく、SOC 高群は肯定的反応が有意に多かった。また刺激文 “私の日常” において、有意味感高群は否定的反応が少なく、SOC 低群は否定的反応が多く肯定的反応が少なく、SOC 高群は肯定的反応が多く否定的反応が少なかった。これらのことから、SOC が低いと否定的反応が増加すること、SOC が高い、もしくは有意味感が高いと肯定的反応が増加すること、把握可能感が高いことは肯定的反応を減少させることがそれぞれ示唆された。

IV. 考察

クラスター分析により 4 つの群に分けることができ、SOC の下位因子によって群が特徴づけられ、SCT の反応に差異が見られた。これらのことは、SOC の下位因子の組み合わせが可能であり、組み合わせによって特徴を持つことを示している。Antonovsky (1987 山崎・吉井訳 2001) は把握可能感、処理可能感、有意味感の 3 つの下位因子は関連が強いために分けることが困難であると述べているが、同時に 3 つの下位尺度に分けて考えることが重要であるとも述べており、今後 SOC の下位因子の組み合わせに注目することの重要性が示唆されたと考えられる。

また、本研究で用いた SCT の刺激文は “世の中” と “私の日常” であり、その反応内容は共に自身の状況や日常生活の態度を示すものである。そのため、SOC 高群において肯定的反応が多いこと、SOC 低群において否定的反応が多いことは従来の研究で指摘されてきた SOC の有用性を支持している。加えて、有意味感高群、把握可能感高群それぞれにおいて、SCT の反応に差異が見られたことは、SOC の各下位因子の高低により自身の状況や日常生活の態度に差が出ることを示唆している。とりわけ有意味感高群においての

Table 3 クラスターごとの各刺激文の特徴

刺激文	反応の種類	クラスター			
		有意味感高群	把握可能感高群	SOC 低群	SOC 高群
“世の中”	肯定的	28 (30.1%) 2.0 *	6 (12.3%) -2.0 *	3 (4.5%) -4.1 **	24 (42.9%) 4.0 **
	否定的	27 (29.0%) -2.4 *	22 (44.9%) 1.0	37 (56.1%) 3.4 **	16 (28.6%) -1.7
	両価的	17 (18.3%) 2.6 **	3 (6.1%) -1.3	5 (7.6%) -1.1	5 (8.9%) -0.6
	中立的	21 (22.6%) -1.2	18 (36.7%) 1.7	21 (31.8%) 1.0	11 (19.6%) -1.4
	合計	93 (100.0%)	49 (100.0%)	66 (100.0%)	56 (100.0%)
“私の日常”	肯定的	40 (43.5%) 0.7	22 (45.8%) 0.8	11 (16.9%) -4.5 **	33 (60.0%) 3.3 **
	否定的	17 (18.5%) -2.0 *	14 (29.2%) 0.6	34 (52.3%) 5.6 **	2 (3.7%) -4.2 **
	両価的	17 (18.5%) 1.8	4 (8.3%) -1.2	7 (10.8%) -0.7	7 (12.7%) -0.2
	中立的	18 (19.5%) -0.1	8 (16.7%) -0.6	13 (20.0%) 0.0	13 (23.6%) 0.8
	合計	92 (100.0%)	48 (100.0%)	65 (100.0%)	55 (100.0%)

上段左：反応数 上段右：それぞれの群における合計に対する割合 下段：調整済み残差
残差分析 * $p < .05$ ** $p < .01$
刺激文に対して空欄だったものは合計から除いた

み刺激文 “世の中” において両価的反応が多くみられたこと特徴的であり、Antonovsky (1987, 山崎・吉井訳, 2001) が述べた有意味感の重要性を示唆するものであると考えられる。各下位因子の高低による違いを明らかにするために、今後より詳細に検討していくことが必要であると考えられる。

引用文献

- Adams, B. T., Bezner, R. J., Drabbs, E. M., Zambarano, J. R. & Steinhardt, A.M. (2000). Conceptualization and Measurement of the Spiritual and Psychological Dimensions of Wellness in a College Population, *Journal of American College Health*, 48, 165-173.
- Antonovsky, A. (1987). *Unraveling the Mystery of Health: How People Manage Stress and Stay Well*. Jossey-Bass Publishers.
- (アントノフスキー, A. 山崎 喜比古・吉井 清子 (監訳) (2001). 健康の謎を解く——ストレス対処と健康保持のメカニズム——有信堂高文社)
- Carmel, S. & Bernstein, J. (1990). Trait anxiety, sense of coherence and medical school stressors: Observations at three stages, *Anxiety Research*, 3, 51-60.

- 遠藤 伸太郎・満石 寿・和 秀俊・大石 和男 (2013). 13 項目 7 件法版 Sense of Coherence scale (SOC-13) の信頼性と 1 因子モデルの妥当性についての検討: 大学生を対象としたデータから, 立教大学コミュニティ福祉学部紀要, 15, 25-38.
- 藤里 紘子・小玉 正博 (2009). 首尾一貫感覚 (Sense of Coherence) とストレス反応, および対処方略との関連, ヒューマン・ケア研究, 10, 23-33.
- 藤里 紘子・小玉 正博 (2011). 首尾一貫感覚が就職活動に伴うストレスおよび成長感に及ぼす影響, 教育心理学研究, 59, 295-305.
- 橋爪 誠・榎木 博茂・中井 吉英 (2005). 健康生成論からみた慢性疼痛, 慢性疼痛, 24, 27-32.
- Kaiser, F. C., Sattler, N. D., Bellack, R. D. & Dersin, J. (1996). A conservation of resources approach to a natural disaster: Sense of coherence and psychological distress, *Journal of Social Behavior & Personality*, 11, 459-476.
- 嘉瀬 貴祥・大石 和男 (2015). 大学生におけるタイプ A 行動様式および首尾一貫感覚 (SOC) が抑うつ傾向に与える効果の検討, パーソナリティ研究, 24, 38-48.
- 小林 哲郎 (1992). SCT (文章完成法) 氏原 寛・小川 捷之・東山 紘久・村瀬孝雄・山中 康裕 (編) 心理臨床大事典 (pp.537-542) 培風館
- 森山 敬子・杉田 聡 (2007). 成人期発症 1 型糖尿病女性の疾病受容に関する研究—健康生成論を用いた分析, 保健医療社会学論集, 18, 51-62.
- 太田 雅規・樋口 善之・神代 雅晴・大和 浩・杉村 久理 (2015). IT 企業におけるストレス対処能力に着目した労働適応能力向上のための職場環境改善, 産業医科大学雑誌, 37, 23-32.
- 佐野 勝男・横田 仁 (1960). 文章完成法テスト解説—成人用— 金子書房
- Söderberg, S., Lundman, B., & Norberg, A. (1997). Living with fibromyalgia: Sense of coherence, perception of well-being; stress in daily life, *Research in Nursing & Health*, 20, 495-503.
- 戸ヶ里 泰典・山崎 喜比古 (2005). 13 項目 5 件法版 Sense of Coherence Scale の信頼性と因子的妥当性の検討, 民族衛生, 71, 168-182.
- 山崎 喜比古・戸ヶ里 泰典・坂野 純子 (2008). ストレス対処能力 SOC 有信堂高文社

付記

本論文は 2009 年度 (平成 21 年度) に神戸大学へ提出した卒業論文を加筆修正したものである。